# 小アカイオスの反乱
## ── セレウコス朝の統治構造と王権確立の課題 ──

柴　田　広　志

セレウコス朝の第6代国王アンティオコス3世（位：前223～187年）は，その治世初期に多くの内憂と外患への対処を迫られた。そのひとつが，小アジアで反旗を翻した王族小アカイオス（以下アカイオス）の反乱である。この有力王族は，アンティオコス3世の兄セレウコス3世の暗殺時の混乱収拾後に王に推戴されたが辞退，後に反乱を起こした際には麾下の軍の反対によって頓挫した。

同時代に類例をほとんど見ないこの事例から，以下の事実が指摘できる。まず，王族による王国統治の分担という，セレウコス朝の支配体制が抱えていた問題である。このため，傍系の王族であっても，王家直系の男子の経験や年齢が不足とみられた時，他の王族が推戴される，あるいは反乱を起こす可能性があったのである。推戴直後にアカイオスが王位を辞退したのは決して忠誠心のあらわれではなく，王家直系のアンティオコス3世に取って代わる意志を当初から有し続けたものと思われる。後の王位宣言は，その現れである。

これに対して，王位を継いだアンティオコス3世の軍事能力，とりわけ北方の蛮族に対する軍事的功績は，アカイオスが獲得し得なかったものであり，若い王の権威確立を可能にするものだった。アカイオスとアンティオコス3世の決定的な差は，セレウコス朝王家内における直系・傍系の差のみならず，バルバロイすなわち蛮族とされた集団に対する戦果の有無にあったことを推測し得るのである。

## は　じ　め　に

前220年，セレウコス朝の小アジア方面統治を担当していた王族の小アカイオス（以下アカイオス）は，王位を宣言して東への進軍を開始した。この時，セレウコス朝の王アンティオコス3世は軍を率いて東方にあり，王朝の本拠であるシリア北部，いわゆるセレウキスは空だった。アカイオスの狙いは，明らかにセレウコス朝の心臓部の奪取にあった。しかし，この企てはアカイオスが指揮する軍の反対にあって頓挫し，以後彼は，その活動を小アジアに限定することを余儀なくされた[1)]。

ウォールバンクはこの経緯を，ヘレニズム諸国の王たちの正統性が確立したことを示

す象徴的な事件のひとつとして評価する[2)]。しかし，この見解に対しては，簡単に首肯することはできない。それは，この3年前にセレウコス朝の先代当主・セレウコス3世が遠征中に暗殺された時，軍中にあったアカイオスが王位に推され，辞退したという事実が存在するからである[3)]。この事実を考慮するならば，ウォールバンクの意見は単純に過ぎるというべきだろう。

いちど王位推戴を辞退した人物が後に王を称する，というのは異例というべき事件であり，ヘレニズム時代全体を見渡してみても，類似の事件を見出すことはできない。先行研究も，違和感を隠さない。ベヴァンはアカイオスによるセレウコス3世殺害を示唆するが，この見解を継承する研究は殆どない[4)]。ウォールバンクはプトレマイオス朝の策動をその背景として推測する。シュミットやイェーネなどはウォールバンクに反対の立場を取るが，説得的な仮説の提示に成功しているとはいえない[5)]。グラボウスキの最近の研究は，先行研究の整理にとどまっており，新たな方向性を示すには至っていない[6)]。アカイオスの王位簒奪の意図を否定するグレインジャーの意見も，説得的とはいいがたい[7)]。

アカイオスの王位僭称に関する諸家の見解の錯綜は，この事件に関する文献史料がポリュビオスの記述に限定されるという難点と不可分ではない。もとよりこれはヘレニズム時代史全般に共通する障害だが，当初アカイオスが見せた王家嫡流への忠誠心に対するポリュビオスの高い評価と，その後の反乱への厳しい批判が後世の研究に与える効果は，考慮されるべきである。

同時に考えるべきは，アカイオスのような王族内の実力者に強力な権限を与えて小アジアという要地に置き続け，最終的に反乱を許すに至った，セレウコス朝の統治構造が抱えていた問題である。王族の処遇は他のヘレニズム王国にも共通した課題であり，セレウコス朝王家におけるアカイオスの位置づけの整理とともに，他のヘレニズム王国との比較検討が必要だろう。

そして，最初アカイオスを王位に推した軍が，3年後に彼の王位僭称に反対したのは何故だろうか。ヘレニズム時代の王にとって，軍からの支持が極めて重要だったことに鑑みれば，この点も重要な課題となる。王位辞退から僭称に至るまでの間に，アカイオスをとりまく政治的な環境は，どのように変化したのだろうか。

以上の整理が示すように，アカイオスの反乱という事件は，ひとりセレウコス朝のある王族のあげた徒花として処理されるべき問題ではない。よって，本稿での分析課題を，以下のように設定する。最初に，アカイオスの王家内での位置づけを整理し，セレウコ

ス朝の領域支配における王族の役割を考察する。次に，セレウコス３世の暗殺から第４次シリア戦争に至るまでのアカイオスの動向を分析し，アカイオスがセレウコス朝の王位を欲するに至った時期と，その理由を検討する。これと並行してアンティオコス３世の動向にも目を配り，若き王とアカイオスをとりまく政治状況の変化を探る。この作業を通じて，アカイオスに対して麾下の軍が示した態度の変化の背景を追及する。こうした問題の検討は，アンティオコス３世の王位確立過程の分析と表裏一体を為すものである。従って，アカイオスの王位簒奪が頓挫する過程の検討を通じて，この反乱者にとどまらず，セレウコス朝の王位確立に求められた条件の見通しを提示することを目標とする。

## 1　アカイオスとは何者か

### 1.1　アカイオス登場時のセレウコス朝情勢

アカイオスが登場した頃，セレウコス朝は苦境にあった。第３次シリア戦争以降，本拠地シリアの「テトラポリス」のひとつセレウケイア・ピエリアは，プトレマイオス朝の支配下に置かれ続けていた。またこの戦争以降，王弟アンティオコス・ヒエラクスが小アジアのサルデイスに拠って王を称して自立し，セレウコス２世との間でいわゆる「兄弟戦争」が展開された。このセレウコス朝の内紛により，新興のペルガモン王国が漁夫の利を得るかたちで大きく勢力を広げていた[8]。これが西方の状況で，東方ではバクトリアが自立し，カスピ海東方から侵入してきたパルティアが，セレウコス朝領を蚕食しつつあった。こうした中でセレウコス２世は没し，後を継いだセレウコス３世は，小アジアへの遠征中に暗殺された[9]。この混乱を収拾したのがアカイオスだった。

### 1.2　アカイオスの出自と家系について

ポリュビオスはアカイオスについて，セレウコス朝の王族としているが，王家との血縁関係については詳らかにしていない[10]。ベロッホは，アカイオスの祖父・大アカイオスをセレウコス１世の子と推測し，ウォールバンクの注釈書もこれを踏襲している[11]。グレインジャーは一時，アカイオスの家系がセレウコス朝の傍系ではなかったと主張し，これに同調する研究者もいたが，この説は大きな支持を得ることがなかった[12]。後にグレインジャーは自説を撤回して，アカイオスをセレウコス朝の一族とする従来説に戻っている[13]。

アカイオスの家系は，大アカイオスが小アジアに拠点をおいた後，小アジアとの強い

関係を保持した。大アカイオスの娘であるアンティオコス2世妃ラオディケ1世は，一時的に王妃の地位を失った際，夫のアンティオコス2世からプリュギアに地所を与えられて小アジアのエペソスに住んだ[14]。このラオディケ1世の兄弟であるアレクサンドロスは，「兄弟戦争」の時期にサルデイスを支配するなど，小アジアにおけるセレウコス朝支配の一翼を担った[15]。また，ラオディケ1世に加えて，セレウコス2世妃ラオディケ2世という2人のセレウコス朝王妃を輩出し，セレウコス朝嫡流との血縁関係を維持した。その一方で，大アカイオスの別の娘アンティオキスはペルガモンの支配者エウメネス2世の一族であるアッタロスに嫁ぎ，その息子アッタロス1世がエウメネスの後を継ぐなど，小アジアにおけるセレウコス朝の婚姻政策に役割を果たしたことが，ストラボンにより伝えられる[16]。

また，軍事指揮官としての活動も伝えられている。セレウコス2世の在位中，アカイオスが父アンドロマコスとともに，アンティオコス・ヒエラクスを攻撃したことが，ポリュアイノスによって記録されている[17]。

以上の事実は，アカイオスの家系がセレウコス朝の初期から小アジア統治の一部を担当し，その地に定着したことを示す。これは，シャーウィン－ホワイトとカートがセレウコス朝の初期からの性格として指摘する，王族による統治の責務の分担の一例といえる[18]。王族による統治の分担の例として，上部諸州すなわち東方所領に王位継承者など有力王族を置いた例がよく知られているが[19]，同様の措置を小アジアでもとった事例として確認できよう。小アジアはセレウコス1世治世の最末期に支配下に入ったことに加え，前270年代のガラティア人侵入の際に土着勢力の自立を許すなど，動揺しがちなところだった。アンティオコス1世･2世がともに小アジアで没したことにみられるように，セレウコス朝の王はしばしば小アジアに滞在した。また，セレウコス2世が王弟アンティオコス・ヒエラクスを置くなど，同地の安定にも常に気を配ったことがうかがえる。

しかし，アンティオコス・ヒエラクスがセレウコス2世に反乱を起こした事実が示すように，有力王族を配置する統治方式は，広大なセレウコス朝領土支配に必要な措置であると同時に，危険も内包するものだったといえる。この点は，プトレマイオス4世即位時に王夫妻を除く王族すべてを粛清したプトレマイオス朝と，対照をなすものといえる[20]。こうした中，兄弟戦争でのセレウコス2世側の軍司令官としての活動にみられるように，アカイオスの家系は一貫してセレウコス朝王家に忠実な姿勢を維持した。

本章における考察を整理する。アカイオス一族は，セレウコス朝の傍系王族として小

アジアに定着し，政治・軍事で役割を果たした。王族を各地に置くセレウコス朝の統治方式は，広大な領地を支配するために必要なものだったが，一方でアンティオコス・ヒエラクスの反乱の事例にみられるように，王族離反の危険をはらむものだった。こうした中，アカイオス一族は一貫して，セレウコス朝当主に忠実な藩屏であり続けた。また，セレウコス朝嫡流や周辺王家との婚姻関係により，セレウコス朝内におけるアカイオスの家系の比重が高まったものと考えてよかろう。アカイオスが，セレウコス３世の小アジア遠征に帯同したのは，ごく自然なことといえる。

セレウコス３世の暗殺後，麾下の軍から王に推されたアカイオスは，その時点ではこれを辞退し，その後王位を宣言した[21]。アカイオスの反乱についてポリュビオスは，アンティオコス３世によるメディア・アトロパテネの君主アルタバザネスへの遠征を契機とみなしている。ここで考察すべきことは，はたしてこの時点を，アカイオスにとって王位を僭称する好機だったとみなしてよいかという問題である。この遠征に先立ってアンティオコス３世はモロンの反乱を鎮圧しており，メディアやバビロニア，そしてモロンの弟アレクサンドロスが統治していたペルシスなど，離反した地域を手許に確保した状態で，対アルタバザネス遠征に乗り出している。換言すれば，アカイオスは権力基盤を強化した若い王に対し，反乱を試みたということになる。

アカイオスは何故，軍からの推戴を受けたセレウコス３世暗殺時ではなく，アンティオコス３世がメディア・アトロパテネ遠征に出発した時点で，王位への野心を顕わにしたのだろうか。ポリュビオスが批判する，アカイオスの変心の背景とは，一体なんだろうか。この疑問を解くためには，アカイオスがセレウコス３世の後継に推戴され，これを辞退した時点から分析を始めることが有効と思われる。次章では，セレウコス３世の暗殺から第４次シリア戦争に至るまでのアカイオスの動向を分析し，アカイオスがセレウコス朝の王位を欲するに至った時期と，その背景を検討する。

## 2　王位辞退から王位僭称までのアカイオスの動向

### 2.1　セレウコス３世暗殺時の状況について

#### 2.1.1　セレウコス３世暗殺～アンティオコス３世即位まで

セレウコス２世の死後，後を継いだセレウコス３世は，即位後の最初の目標をペルガモン遠征とした。父王在位中の小アジアでの失地回復を目指したものである。しかし，この作戦はセレウコス３世が陣中でアパトゥリオスとニカノールに暗殺されたことにより，

頓挫した[22]。その後，アカイオスが暗殺者たちを処断したのは先述の通りである。ここではアカイオスが王の親族であることをポリュビオスが強調しており[23]，混乱収拾にあたってセレウコス朝の王族としての立場が有効に作用したことが推測される。混乱収拾直後，アカイオスは王に推戴されるがこれを辞したため，東方の上部諸州にいた王弟アンティオコスがアンティオコス3世として即位することになった。

### 2.1.2　アカイオス推戴と，王位辞退の背景事情

ヘレニズム時代の王にとって，軍からの支持を得ることがきわめて重要だったことは，先行研究が一致するところである[24]。軍からの歓呼によって王を称するというのは，アンティゴノス1世モノプタルモス以来，ヘレニズム時代に一貫した慣行である。この軍による歓呼を受けるために，ヘレニズム諸王国の王たちは非常に腐心した。その一方で，王位への推戴を辞退した例は少ない。管見の限りでは，前270年代初頭にヘレニズム世界にガラティア人が大挙侵入した際，マケドニア王プトレマイオス・ケラウノスの戦死後にガラティア人の侵入を防いだマケドニアの「将軍」ソステネスの例を同様の例として挙げ得るのみである[25]。

傍系だったにもかかわらず，アカイオスが推戴されたのは何故だろうか。この点については，小アジアで彼の家系が蓄積した統治の実績や在地勢力とのネットワークに加え，アカイオス自身の豊富な軍事経験が支持されたためであったことが考えられる。前章でみたように，アカイオスの軍事指揮官としての活動はセレウコス2世の時期，「兄弟戦争」におけるアンティオコス・ヒエラクス追撃戦で確認できる。セレウコス3世の軍中で占めていた重要な役割は，王暗殺時に彼が果たした主導的役割をみれば明白である。

**図１　アカイオス肖像。右下は硬貨の反対側，「王アカイオス」の銘あり。**

出典：Mørkholm, O.（1991）
*Early Hellenistic Coinage from the Accession of Alexander to the Peace of Apamea*（336-188 BC）, Cambridge, fig. 403.

また，アカイオスの軍歴や，図１で示した現在に伝わる彼の肖像は[26]，彼がアンティオコス３世よりも年長だったことを示唆する。これは，アカイオスの王位推戴の有力な理由となったのではないだろうか。これより前，アンティオコス３世の父セレウコス２世は，その父アンティオコス２世の死にあたって，父王の２番目の妃ベレニケ・シュラ所生の王子アンティオコスと跡目を争ったが，この争いはアンティオコスの暗殺によってセレウコス２世に軍配が上がった[27]。アンティオコスにはプトレマイオス朝という強力な後ろ盾があったが，これを退けてセレウコス２世が王位を継承し得たのは，アンティオコスが未だ幼年であったことが要因として考えられる。

この時期の他国でも，同様に幼少の王の即位を避けたと思われる事例が見受けられる。マケドニアのアンティゴノス朝では，デメトリオス２世死去の時点で世嗣ピリッポスが幼年だったため，傍系のアンティゴノス３世ドーソンが中継ぎとして王となっている[28]。一方のアンティオコス３世は，アッピアノスの記述をみると成年に近い年齢であったようだが，ポリュビオスは「子供といってよいくらいに若かった」としており，ユスティヌスもその若さを強調している[29]。さらに時代をさかのぼれば，アレクサンドロス大王も即位時に，その若さを問題視する勢力への説得を行う必要があったことは参考に値しよう[30]。

また，この時点でのアンティオコス３世の統治実績としては，兄セレウコス３世即位以降に上部諸州で経験した，短期間の実務を確認し得るのみである。すなわちセレウコス３世死亡時に彼に付き従っていた将兵にとって，アンティオコス３世は遠い存在であり，実力のほども未知数な若者であった。セレウコス３世配下の将兵はアカイオスに，マケドニアのアンティゴノス３世と同様の役割を期待し，王に推戴したものと考えてよい

だろう。

アカイオスは何故，この王位推戴を辞退したのだろうか。その時点の状況を整理すると，もっとも先王に近い近親者の王弟アンティオコス（後の3世）が上部諸州に居た。このときアンティオコスが「上部諸州総督」として統治にあたっていたことは，ベングトゾン以下，先行研究の見解が一致するところである[31]。また，セレウコス3世から留守を任された宰相ヘルメイアスも健在で，アカイオスが王として立った場合には，これらの勢力との間に衝突が発生することは避けられなかっただろう。

以上のように考察すると，セレウコス3世暗殺時の王位推戴をアカイオスが退けたのは，セレウコス2世が治世を通じて苦しめられた「兄弟戦争」の再現を避けることを最優先したためと考えられる。王位継承が中継ぎとしてのものだった場合でも，王弟アンティオコスとの軋轢は不可避だったと考えられるからである。兄弟戦争でセレウコス朝の小アジア支配は大きく揺らいでいた。小アジアと深いかかわりを持ってきたアカイオスはその様子をつぶさにみており，同様の事態を避けるべく王位宣言を辞退したと思われる。

この時点でアカイオスはセレウコス朝の王座への野心を有していたか否か，未だこの段階では明白ではない。さらなる検討が必要である。

### 2.2　アンティオコス3世即位後のアカイオスの動向

#### 2.2.1　事実経過

アンティオコス3世即位後，アカイオスは引き続き対ペルガモン戦線を担当することとなった[32]。グレインジャーは，アカイオスがセレウコス3世殺害後の前222年にタウロス山脈を越えたとするが[33]，ポリュビオスの記述からみて，引き続きタウロス山脈の北側に留まり続けたと考えた方が妥当だろう。セレウコス3世の軍のうち一定数は，エピゲネスがアンティオコス3世のもとに連れ帰っているため，引き続いてアカイオスの指揮下に残った数は定かではない[34]。ただし，その後の対ペルガモン王国戦での優位な状況は，相当な規模の部隊を手元に残していたことを示唆する。

この，おそらくは年長の親族に対して，アンティオコス3世は小アジア方面における大きな権限を与えている。その一方で，この若い王が絶えずアカイオスに対して注意を払っていたことが，ポリュビオスによって伝えられる。アンティオコス3世の即位直後にメディアのサトラップであるモロンが反乱を起こした際，アンティオコス3世は対策協議の場をゼウグマのセレウケイアで設けた[35]。このとき，先代以来の宰相ヘルメイア

スが，プトレマイオス朝からアカイオスに対して接触を試みた証拠となる書簡を，アンティオコス3世に提出した[36]。その書簡中で，プトレマイオス朝側はアカイオスに反乱を教唆している。ポリュビオスはこれを捏造と断定しているが，ウォールバンクは本物である可能性も認めている[37]。ただし，この時点では書簡の内容を「すっかり信じた」はずのアンティオコス3世は，対プトレマイオス朝戦のため，コイレ・シリア方面に向かっている[38]。

コイレ・シリアに向かう前，ゼウグマのセレウケイア滞在中に，アンティオコス3世はポントス王ミトリダテス2世の娘，ラオディケ3世を王妃に迎えた[39]。ミトリダテス2世はアンティオコス2世の娘を妻としており，これはいとこ同士の結婚ということになる。アカイオスもラオディケ3世の姉妹，同名のラオディケを妻としている。アカイオスがラオディケを妻としたのは前223年に小アジアに軍を進めるよりは後のことであるとグレインジャーは推測している[40]。一方，前218年までに結婚していたことは，ポリュビオスの記述から見て明らかである[41]。

グレインジャーはアンティオコス3世の婚姻について，アンティオコス3世とアカイオスの関係を強化するものだったとしている[42]。この推論については，アカイオスの婚姻の時期について判断しうる史料がなく詳細不明とするしかないが，相前後する時期だったことは間違いないだろう。この婚姻がアンティオコス3世の前後いずれの時期に行われたにせよ，アカイオスの王家内での威信が高まったのは間違いない。

### 2.2.2　対モロン遠征以前のアカイオス反乱の真偽

ゼウグマでの御前会議の時点では，アンティオコス3世はアカイオスとプトレマイオス朝の通謀を，現実のものとは考えていなかったのではないだろうか。すなわち，プトレマイオス朝にはセレウコス朝の内情に介入する余地なしと判断したと，推測し得る。後でも触れるが，アカイオスの離反が確実なものとなった際，アンティオコス3世とその幕僚が最初に取り組んだ事業は，先々代の国王セレウコス2世が第3次シリア戦争で奪われて以来，プトレマイオス朝の支配下に置かれていたセレウケイア・ピエリアの奪還だった[43]。第3次シリア戦争では，プトレマイオス3世がセレウケイア・ピエリアに上陸して，セレウコス朝領深くに侵攻している[44]。この前例から，アンティオコス3世がプトレマイオス朝とアカイオスの連携が成立した場合に，もっとも憂慮すべき事態は両者が連携し合ってのセレウキス侵攻と考えられる。この事態に対する予防措置が取られていないことは，プトレマイオス朝とアカイオスの連携を，アンティオコス3世が想定

していなかったことのあらわれと考えられる。

この推測は，当該時点でのプトレマイオス朝の内情によって補強することが可能である。前221年にプトレマイオス3世が死去してプトレマイオス4世が即位した直後，有力王族が殆ど粛清され，王族で残ったのはプトレマイオス4世と，彼の妃となった妹のアルシノエ3世のみだった[45]。こうした王位交代直後の王家の内紛のため，プトレマイオス朝には小アジアに手を伸ばす余裕はなかったとみてよい。

また，モロンに対しては派遣された軍が，アカイオスに対しては差し向けられていないことも注目されるべきである[46]。この点からも，アンティオコス3世はアカイオスの動向を意識しつつも，武力行使の対象としていないと推測できる。これは，アンティオコス3世が対プトレマイオス朝戦を中止して，モロン討伐のために自らバビロニアに出陣した際も同様である。

以上の検討から，アンティオコス3世が対プトレマイオス朝作戦を中断するまでの間，アカイオスが反乱を起こす気配や，彼に対するプトレマイオス朝の内通工作はなかったものと考えられる。こうした事態は，アンティオコス3世が東方に軍を向けた後に変化する。

### 2.3 アカイオスの王位僭称

#### 2.3.1 アカイオスの王位宣言とシリア侵攻の頓挫

アカイオスが王位を称したのは，アンティオコス3世の対アルタバザネス遠征を直接の契機としてのことである。その背景として，ポリュビオスは次のような見解を披露する。

> しかし遠征が予想以上にうまく運んで，アッタロスを本拠のペルガモンに封じ込め，それ以外の地域をことごとく制圧するに至ったとき，アカイオスは自らの成功に有頂天になり，一転して常軌を逸してしまった。そして（王位を示す）ディアデマを着け，自らを王と宣言したアカイオスは，その頃にはタウロス山脈のこちら側を領する王や諸侯のうちで最大の威信と実力を備えた人物になっていた[47]。

すなわちポリュビオスは，アカイオスが自身の軍事的成功に有頂天になり，常軌を逸して王位を宣言したとする。この軍事的功績とは，アッタロス1世の勢力範囲を，本来の領地であるペルガモン周辺に縮小させ，小アジアの多くの部分をセレウコス朝下に引き戻したことだろう。

アレンは，アカイオスとアッタロス1世は前220年までに，休戦に合意していたとみ

る。その根拠は，この年にビュザンティオンがアカイオスとアッタロス１世の双方に同時に申し入れた支援要請と，アカイオスの反乱である[48]。アカイオスとアッタロス１世があからさまな敵対関係であった場合，ビュザンティオンが両者に同時に要請を行うとは考えにくい，というのがアレンの主張である[49]。また，アカイオスがペルガモンに背をむけてシリア方面に進軍できたのは，アッタロス１世との間に休戦合意が成立していたため，とアレンは考える。グレインジャーも，このアレンの指摘を踏襲している[50]。アンティオコス３世のモロン討伐とほぼ機を同じくして，アカイオスも対ペルガモン戦に一段落を付けていた，とみることができよう。

その後，アカイオスはアンティオコス３世の不在を狙ってシリアへの侵攻を試みた。このときアカイオスは，プリュギアのラオディケイアでの王位宣言の後には，各都市に王としての命令を布告するなどした[51]。しかし，タウロス山脈に近いリュカオニア近辺で兵士たちの反対に遭い，サルデイスに引き返している[52]。

### 2.3.2　アカイオスと将兵との不一致の背景

一度は王位を辞退したアカイオスが，なぜ，この段階に至って反旗を翻したのだろうか。そして，かつては進んでアカイオスを王に推戴した兵士たちが，この段階でアカイオスのセレウコス朝全域の王への野心に異を唱えたのはなぜだろうか。ここでは，この間にどのような変化があったのかを考察する。

セレウコス３世の死後，この時点までにアカイオスがおさめた最大の成果は，軍事指揮官としての能力の証明に成功したことだろう。小アジアを全面的に任せられることにより，アカイオスの地位はセレウコス２世治世中，およびセレウコス３世殺害時と比べて飛躍的に重要性を増していた。そしてアカイオスはその地位に見合うだけの能力を示し，ポリュビオスをして「タウロス上方の王侯の中でもっとも有力」と評されるに至ったのである。

一方アンティオコス３世も，モロンの反乱鎮圧からメディア・アトロパテネ遠征という一連の軍事活動の中で，王としての実績を積み重ねていった。モロンとの決戦において，モロン軍が王の姿を見ると崩れたという事実は，軍が基本的に王に忠実だったというウォールバンクの説明の根拠となっている。また，モロンの征伐に先立って粛清されたエピゲネスが，反乱の初期に王自身の出馬が鎮圧に有効であるとの見通しを示したことにも注意したい[53]。モロンの反乱をめぐるこれらの事実や，セレウコス３世暗殺時のアカイオスによる混乱収拾は，前３世紀末ごろまでに，ヘレニズム諸王朝が正統性を確

立したことを物語るものといえよう。しかし王家内部では，傍系の王族が王位に推戴される可能性があったことは，アカイオスやアンティゴノス3世の事例が示すとおりである。

ここで，アカイオスがアンティオコス3世に決定的な差をつけられることになったと考えられるのが，引き続くメディア・アトロパテネ遠征である。ヘレニズム諸王国の第2世代以降の王たちが，バルバロイすなわち蛮族とされた集団との戦争によって最終的な正当性を獲得することを求められ続けた，という先行研究の指摘をここで確認したい[54]。この指摘に鑑みるならば，アンティオコス3世はこの北方への軍事行動によって，セレウコス朝の継承者として相応しいことを示したことになる。一方，ガラティア人をはじめとするバルバロイ集団に対する軍事功績は，アカイオスの活動の中で確認することができない。そこで着目されるのが，アンティオコス3世のメディア・アトロパテネ遠征出発を聞いたアカイオスが，王に危害が加えられることを期待したという記述である[55]。これは，この遠征が失敗した場合，アンティオコス3世にとっては肉体への危害だけではなく，王としての権威喪失につながったことを示唆する。以上の点を考慮すると，アカイオスが反乱を起こしたのは，アンティオコス3世の王権確立前の最後の好機を狙ったものと推測し得る。

メディア・アトロパテネに対するアンティオコス3世の遠征は，しかしながら若い王の実績構築に大いに資するものだった。その軍事実績は，アカイオス麾下の将兵に若い王の正当性を認めさせ，彼らの将の反乱行為への反対を表明させるに足るものだった。これに対し，アカイオスは彼らに略奪行為を認め，懐柔せざるを得なかった[56]。

同時に注意したいのは，アカイオスの将兵たちは，自分たちの指揮官が小アジアに行動を限定している限り，その行動に付き従ったと考えられることである。後に，第4次シリア戦争後のアンティオコス3世による追討戦では，アカイオスの将兵たちのうち多くの者が，アンティオコス3世に対する抵抗を諦めなかった領袖に対し，サルデイスでの最後の攻防戦まで従ったことは，この推測を裏付けるものといえる。

本章で検討してきたことを整理する。セレウコス3世の暗殺直後の混乱を収拾したアカイオスは，掌握した軍によって王位に推戴されるなど，セレウコス朝の王位を狙い得る立場を得た。しかし，アカイオスはこの時点では，セレウコス朝王家内での内紛によって周辺諸国を利することを避けるため，王弟アンティオコス3世に王位を譲った。しかし，王位への野心は当初から維持し続けており，その野心に相応しいことを示すため，軍

事的な実績を蓄積することに専念したと考えられる。

アンティオコス3世のメディア方面，さらにはその北方への転戦に際してアカイオスが王位宣言とシリアへの軍事行動に踏み切ったのは，王位を得るための最後の機会と考えたためとみるべきだろう。しかし，対モロン戦やメディア・アトロパテネ遠征によって，アンティオコス3世は王としての勇気や軍事能力を有することを示した。このため，アカイオスの麾下の軍は動揺し，指揮官の行動への不服従を示した。もっとも彼らは，アカイオスが小アジアに留まる限りにおいては，アカイオスを仰ぎ続けた。

こうしたアカイオスの行動は，アンティオコス3世の承認し得るところではなかった。彼はアカイオスに書簡を送って，その行動を牽制した。このアンティオコス3世によるアカイオスへの問責書簡には，プトレマイオス朝との通謀の告発がみられる。この点に関して，章を改めて考える。

## 3　アカイオスとプトレマイオス朝との連携

### 3.1　アカイオスとプトレマイオス朝の連携

#### 3.1.1　第4次シリア戦争の経過

アカイオスとプトレマイオス朝は，プトレマイオス朝にとらわれていたアカイオスの父アンドロマコスの解放をめぐって接触していた。アンドロマコスがプトレマイオス朝の手中に落ちた時期は，不明である。グレインジャーは，セレウコス3世が自身の遠征に先立ってアンドロマコスを先発させたが，アッタロス1世に捕縛されてエジプトに転送されたとの仮説を立てている[57]。この他，拉致されたとの説もあるが，詳細は不明である。

アカイオスとプトレマイオス朝の接触は，第4次シリア戦争の時に明白なものとなった。コイレ・シリアを順調に南下していたアンティオコス3世は，プトレマイオス4世側の休戦協定の提案を受けて一次休戦し，和平交渉を持った。この時アンティオコス3世は，前線から離れたセレウケイア・ピエリアに滞在して交渉を行っている[58]。和平交渉において，プトレマイオス4世側は和議の条約にアカイオスも加えることを主張した。しかしアンティオコス3世はこれを拒否し，和平交渉は決裂した。

戦役の再開後，アンティオコス3世の進撃はなおも続くが，前217年のラピアの会戦でプトレマイオス4世に敗れるとシリアのアンティオケイアに急速に後退し，プトレマイオス4世との和議を急いだ。この時も，アンティオコス3世はアカイオスの攻撃を懸

念したとポリュビオスは伝える[59]。この和議呼びかけをプトレマイオス4世は受け入れ，両者は和議を結んだ。

### 3.1.2 第4次シリア戦争でのアカイオスの動向

第4次シリア戦争で注意したいのは，戦役序盤のアンティオコス3世の軍事行動の展開と，この戦争の間のアカイオスの動向である。

即位直後のプトレマイオス朝に対する軍事行動に際し，アンティオコス3世はセレウケイア・ピエリアを差し置いて南下し，レバノン山脈とアンティレバノン山脈に挟まれたマルシュアスの地溝帯に侵入した[60]。それに対して前219年の際には，セレウケイア・ピエリアの回復を最優先している[61]。先にヘルメイアスが「偽造」したアカイオスのプトレマイオス朝宛書簡に接した時との対応の違いは，アカイオスの離反とプトレマイオス朝の通謀が決定的になったことによるものと考えられる。先のゼウグマにおける会議の時点のアンティオコス3世とその宮廷のとった行動は，プトレマイオス朝とアカイオスの通謀を否定する見方が多数派を占めたことを示すものと考えてよかろう。

この戦争の間，アカイオスは小アジアで活発に軍事行動を行っているが，シリアをうかがう姿勢は見せていない。マによれば，「王アカイオス」と称して発送された書簡は確認されていない[62]。こうした事実は，アカイオスの王位への野心を否定するグレインジャーの主張を裏書きするもの，という見方も可能であるかもしれない。

しかし，ポリュビオスの記述にあらわれる同時代人の行動は，グレインジャーの見方を否定する。前218年，ピシディア地方に派遣されたアカイオスの部将ガルシュエリスは，周辺都市に助力を要請した。これに対し，シデという都市はアンティオコス3世への忠誠から，要請を退けた[63]。アカイオスが依然として，アンティオコス3世に対する反乱者としてみられていたことの証拠といえよう。また図1で示したように，ディアデーマを頭に帯びたアカイオスの像が刻まれた貨幣の存在から，アカイオスが王位への野心を取り下げたとは考えにくい[64]。

こうした事情があればこそ，プトレマイオス4世もアカイオスを和議に加えることを主張して，アンティオコス3世に揺さぶりをかけたのであろう。プトレマイオス4世側には和議を締結する意図は希薄であり，この和平交渉を時間稼ぎだったとするポリュビオスの評価は，至極妥当なものといえる[65]。アンティオコス3世の後背への不安は，ラピア会戦後のセレウコス朝軍の急速な後退と，迅速な和平申し入れからもみてとることができる。

### 3.2 第4次シリア戦争後のアカイオスの動向

#### 3.2.1 第4次シリア戦争後の事態の推移

戦役後の和議締結の際のアカイオスの扱いについて，ポリュビオスは一切語っていない。サルデイスに包囲されたアカイオスの救出を試みた事実は，プトレマイオス4世とアカイオスの連絡が維持されていたことを示す[66]。しかし，救援のために派遣されたボリスは密かにアンティオコス3世に通じ，アカイオスをアンティオコス3世に引き渡したため，反乱は終結した[67]。アンティオコス3世がプトレマイオス朝の水面下での動きを批判した様子は，少なくともポリュビオスからはうかがえない。アンティオコス3世は，父の代の兄弟戦争の轍を踏むことなく，アカイオスを降すことに成功した。彼は有力な幕友のゼウクシスをアカイオスの後釜に据え，小アジアの掌握を図った。その後，彼自身は東方への遠征に乗り出すこととなった。

#### 3.2.2 アカイオスに対する対処の分析

アンティオコス3世とプトレマイオス4世の間に結ばれた和議の条件には，アカイオスの庇護が含まれなかったと考えてよい。これは，翌年からのアンティオコス3世によるアカイオス征討戦の経過から明らかである。この間，プトレマイオス4世は表だってアカイオスを援護する姿勢をみせていない。

ポリュビオスは，第4次シリア戦争後にプトレマイオス4世が生来の怠惰な生活に回帰したこと[68]，およびラピアの会戦の直後からエジプトで反乱が発生したと伝えており[69]，プトレマイオス朝側には積極的な軍事行動に出る余裕や意思がなかったとの観測も可能かもしれない。しかし波部雄一郎はプトレマイオス4世の治世が平穏のうちに推移したことを指摘しており[70]，セレウコス朝に対する軍事行動に乗り出す程度の余裕は，持ち合わせていたと思われる。

この点に関して，以前の研究で指摘したことを確認したい。セレウコス朝とプトレマイオス朝が各シリア戦争後に交わした盟約は，両者いずれかの当主が死亡するまでは継続し，不可侵が守られるのが常だったということである[71]。これは，シリア方面のみならず小アジアでも同様のことと考えられる。従って，プトレマイオス4世はこの時，シリアと併せて小アジアのプトレマイオス朝領土の確保を優先し，アカイオスの扱いに触れずに和議に応じたものと考えてよかろう。その後のプトレマイオス4世による小アジア情勢の静観とアカイオスへの軍事援助の不在は，ポリュビオスが主張するプトレマイオス4世自身の無気力によるものではなく，アンティオコス3世との和議を遵守したた

めと考えるのが妥当である。

サルデイスに包囲されたアカイオスの救出を試みているところから，プトレマイオス4世がアカイオスとの関係を完全に絶ったわけではないと思われる[72]。しかし，ボリスによる救出作戦は，軍を率いてのものではなく，単身での行動だった。戦争の当事者いずれかの死に至るまで和平協定が維持されるというシリア戦争での原則は，ここでも確認できる。

### 3.3 アカイオスは，セレウコス朝の王位を欲したか

アカイオスは，果たしてセレウコス朝全体の王位を欲していたのか。最後に，この点を整理しておきたい。

第4次シリア戦争で，アカイオスはアンティオコス3世不在のセレウキスを狙う姿勢を見せなかった。しかし，アンティオコス3世に対する最初の反乱の時にみせたシリア侵攻の姿勢は，アカイオスがセレウコス朝全体の君主の地位を目指していたことを示す。また，第4次シリア戦争後には，ペルガモンのアッタロス1世と挟撃する体勢をとったアンティオコス3世の攻勢に対し，最後まで抵抗をあきらめなかった。根拠地であるサルデイスでの攻防戦では，アカイオスはアンティオコス3世に包囲されながらも，プトレマイオス朝の手引きで包囲を脱出し，シリアを狙う姿勢をみせている[73]。すなわち，アカイオスは最後まで，セレウコス朝全体の王位への野心を失うことはなかったと考えられる。したがって，アカイオスが小アジアで満足し，アンティオコス3世の王位を転覆させることをめざしていなかったとするグレインジャーの評価には，従いがたいといわざるを得ない。

以上，アカイオスとプトレマイオス朝との連携関係を検討してきた。ここから伺えるのは，アカイオスとプトレマイオス4世の通謀により，アンティオコス3世は第4次シリア戦争でシリア戦線への専念を妨げられたということである。プトレマイオス朝との和平交渉が前線から離れたセレウケイア・ピエリアで行われたことや，第4次シリア戦争の決戦であるラピアの会戦の後，アンティオコス3世が急速に後退して和議を提案したことに，その不安をみることができる。

しかし，こうしたシリアを挟撃する構図は，第4次シリア戦争の終結で終わることとなった。プトレマイオス4世は，アカイオスを見捨てる形で和議を承諾した。この結果，アカイオスはプトレマイオス朝からの救援を得られぬままに，アンティオコス3世の攻

撃に臨むこととなり，敗死することとなったのである。ポリュビオスが記述するように，アカイオスは最期まで王位への野望を持ち続けたが，その挑戦はここに終わりを告げることとなったのである。

## お　わ　り　に

最後に，本稿での検討の結果をまとめる。

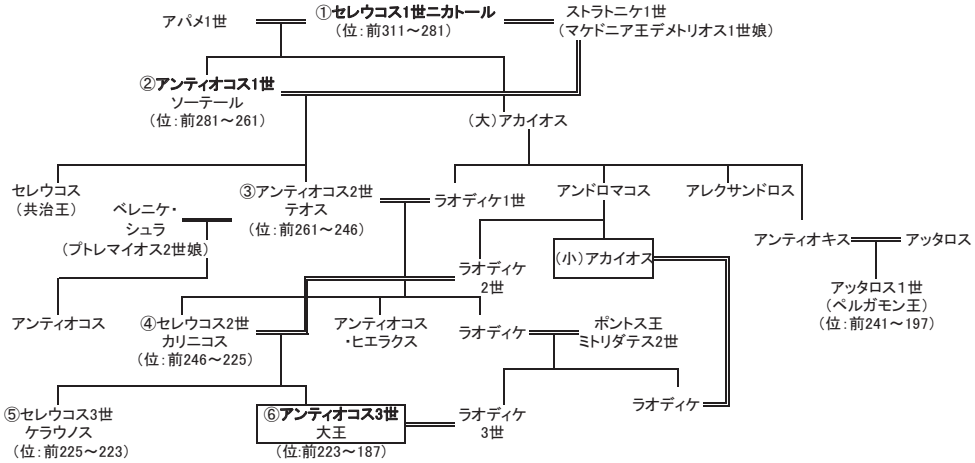
アンティオコス・ヒエラクスやアカイオスのような，小アジアにおける有力王族の反乱は，王族各員による統治の分担という，セレウコス朝の統治手法の欠点を露呈するものだったといえる。いずれの事例においても，セレウコス朝の当主は対処のために長期間，力を注がざるを得なかった。アカイオスのような傍系の王族であっても，小アジアに長期間定着した一族の勢力は，侮りがたいものに成長する危険性を持っていた。

アカイオスは，その軍事能力をセレウコス２世支配の時期から発揮し，そのためセレウコス３世暗殺時には，将兵から王としての推戴を受けるほどだった。しかし，アカイオスはこれを辞退した。その原因は，ポリュビオスが主張し，他の研究者も同調するようなセレウコス朝嫡流への忠誠心からではなかった。小アジアで長く活動を続けていたアカイオスは，将兵からの王位申し出を受諾することによってセレウコス朝内部での内紛を引き起こし，小アジアでの敵対勢力を利する事態を恐れたため，王位を辞退したのである。

彼のその後の行動は，むしろアカイオスが当初から王位を欲していたことを物語る。小アジアでのペルガモンとの戦争による戦果は，彼がその野心を実現させるための実績を蓄積させるものだったといえよう。ペルガモンとの戦争を有利に進め，アッタロス１世の勢力をその本領にまで縮小させたのは，その能力の証明として十分なはずだった。こうした軍事的実績を背景に，アカイオスは王位を宣言した。

しかし，アカイオスの積み重ねた実績は，アンティオコス３世との地位を逆転させるには不十分だった。アンティオコス３世がモロン征討の余勢を駆って行ったメディア・アトロパテネ遠征によって得た権威と実績は，かつてアカイオスを王位に推戴した，アカイオス指揮下の兵たちの姿勢を変えるに足るものだった。この事態に接し，アカイオスはセレウコス朝王位への野心を断念せざるを得なかった。アカイオスの反乱鎮圧後，アンティオコス３世は王族や血縁関係のある者ではなく，有力な幕友のゼウクシスを小アジアに置いた。これ以降，王族の離反という事態は，彼の治世では再発することはなかっ

図２　セレウコス朝系譜




Beloch（1912-27）, Walbank, *HCP* I（1957）, Ogden（1999）などより作成

た。有力幕友の配置という措置は，小アジアにおけるセレウコス朝統治の再編と同時に，この地に赴任した王族が力をつけることを防ぎ，東方遠征中の王の後背を脅かすことはなかった。

ポリュビオスは，アカイオスをして，当該時期の小アジアの君主たちの中でも最大の威信と実力を持った存在と評した。しかし「王アカイオス」とは記述していない。王としては，欠ける要素があったのである。嫡流・傍流という点以外に，アンティオコス３世の後塵を最終的に拝することになった要因は，アンティオコス３世が獲得してアカイオスが得られなかった，バルバロイに対する軍事的功績の欠落にあったと考えられる。この事実は，ヘレニズム時代の王権の確立にあたり，バルバロイとされた集団に対する軍事実績を獲得することの重要性を示す事例と評価できる。

**注**

1）Polyb.5.57.

2）Walbank, F.W.（1981）*The Hellenistic World*, London, 76-7.（小河陽訳『ヘレニズム世界』106頁）.

3）Polyb.4.48.

4）Bevan, E.（1902）*The House of Seleucus*, London, vol.1, 300.

5）Schmitt（1964）*Untersuchungen zur Geschichte Antiochos' des Grossen und seiner Zeit*, Wiesbaden, 164; Jähne（1997）'Achaios – König und Rebell', *Altertum* 42, 127; Hölbl（2001）127-8.

6）Grabowski, T.（2011）“Achaeus, the Ptolemies and the Fourth Syrian War”, *Electrum* 18, 117.
7）Grainger（2010）195.
8）Polyb.4.48.7.
9）Polyb.4.48.6-9.
10）Polyb.4.48.5.
11）Beloch, K.J.（1925-27）*Griechische Geschichte*, 2. Aufl. IV.2.202-6; Walbank, *HCP* 1, 501.
12）Grainger, J.D（1997）*A Seleukid Prosopography and Gazetteer*, Leiden and New York, 5.; Hoover, O.（2007）*Coins in the Seleucid Empire from the Collection of Arthur Hougton*, 35.
13）Grainger, J.D.（2010）*The Syrian Wars*, Leiden; Boston, 68, n.30. セレウコス朝の系譜については，本文最終頁の系図を参照のこと。
14）*OGIS* 173; RC 18-20; Austin 2nd, 173;
15）Bengtson, H.（1944）*Die Strategie in der hellenistischen Zeit*, II, SS. 93-105.
16）Strabo 13.4.2.
17）Polyaen.4.17.
18）Sherwin-White, S., Kuhrt, A.（1993）*From Samarkhand to Sardis – A New Approach to the Seleucid Empire*, Berkeley and Los Angeles, 25-6.
19）セレウコス 1 世による「共治王」アンティオコス 1 世の東方派遣：Appian, *Syr*.61。および，セレウコス 3 世治世期のアンティオコス 3 世：Polyb.5.40.5.
20）Polyb.5.34.1-2.
21）Polyb.5.57.
22）Polyb.4.48.7-8.
23）Polyb.48.9.
24）Walbank, F.W.（1984）‘Monarchies and Monarchic Ideas’, *CAH* 2nd, VII/1 , 62-100；Austin, M.M.（1986）‘Hellenistic Kings, War and the Economy’, *Classical Quarterly* 36, 450-66. など。
25）D.S.22.4; Justin, 24.5 ; Bengtson（1960）*Griechische Geschichte*, München（Zweiter Aufl.）, 392; Green（1990）*Alexander to Actium: The Historical Evolution of the Hellenistic Age*, Berkely and Los Angeles, 134.
26）Mørkholm, O.（1991）*Early Hellenistic Coinage from the Accession of Alexander to the Peace of Apamea*（336-188 BC）, Cambridge, fig. 403; Jähne（1997）abb.3，および本文中の図 1 参照。
27）Justin.27.1.3; Polyaen.8.50; Gutzwiller, K.（1992）‘Callimachus’ *Lock of Berenice*: Fantasy, Romance, and Propaganda’, *American Journal of Philology* 113, 359-60。
28）Justin, 28.3.
29）Polyb.5.34.2; Justin, 29.1. ウォールバンクは，前 191 年にアンティオコス 3 世が 50 歳だっ

たとするポリュビオスの記述から，この王の生年を前242年か241年としている。Polyb.20.8.1, Walbank, *HCP* I, 450.

30）D.S.17.2.2.

31）Bengtson（1937-52）*Die Strategie in der hellenistischen Zeit*, München, II, 84-5 ; Boiy（2004）153; Grainger（2010）184. シュミットは, 即位前のアンティオコス3世がティグリス河畔のセレウケイアに居住していたと推測している。Schmitt（1964）3.

32）Polyb.4.48.5-10.

33）Grainger（2010）183.

34）Polyb.5.41.4.

35）Polyb.5.43.1.

36）Polyb.5.42.7.

37）Walbank, *HCP* I, 573.

38）Polyb. 5. 42.9.

39）Polyb.5.43.1-5.

40）Grainger 1997, 49.

41）Polyb.5.74.4-6.

42）Grainger 2010, 186.

43）Polyb.5.58-60.

44）Justin 27.1; Polyaen.8.50.

45）Polyb.5.34.1, 15.25.1-2; Plut. *Cleom*. 33.3.

46）Polyb.5.42.5.

47）Polyb.4.48.11. 訳文は城江良和訳より，以下同。

48）Polyb.4.48.1-4; 12-13.; Allen, R.E.（1983）*The Attalid Kingdom: A Constitutional History*, Oxford, 37.

49）Allen（1983）37.

50）Grainger（2010）188.

51）Polyb.5.57.5.

52）Polyb.5.57.

53）Polyb.41.7-9.

54）Cf. Mitchell, S.（2003）'The Galatians: Representation and Reality', in: Erskine（ed.）, *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 280-293

55）Polyb.5.57.3.

56）Polyb.5.57.7-8.

57）Grainger（2010）181-2.

58）Polyb.5.66.6-68.1.

59）Polyb.5.87.2.

60）Polyb.5.59.2.

61）Polyb.5.58-61.2.

62）Ma, J.（1999）*Antiochos III and the cities of Western Asia Minor*, Oxford, 57.

63）Polyb.5.73.4.

64）Mørkholm（1991）fig. 40; Jähne（1997）abb.3，および本文 7 頁，図 1 参照。

65）Polyb.5.63.2-6.

66）Polyb.8.15.2-8.

67）Polyb.8.15-21.

68）Polyb.5.87.3.

69）Polyb.5.107.1-3.

70）波部雄一郎（2014）『プトレマイオス王国と東地中海世界 : ヘレニズム王権とディオニュシズム』関西学院大学出版会，267 頁。

71）拙稿（2006）「シリア戦争をめぐる考察」『古代史年報』4 号，11 － 16 頁，および（2007）「ヘレニズム時代の王権と自他認識－セレウコス朝とヘレニズム世界東方を中心に」『洛北史学』9 号，55 － 60 頁。

72）Polyb.8.15.2-8.

73）Grainger（2010）195.

**略号一覧**

Austin 2nd: Austin, M.M.（ed.）（2006）*The Hellenistic World from Alexander to the Roman Conquest*, 2nd ed., Cambridge.

*CAH* 2nd : *Cambridge Ancient History*, 2nd edition.

*FGrH*: Jacoby, F.（1923- ）*Die Fragmente der griechischen Historiker*.

Sachs and Hunger: Sachs, A.J. and Hunger, H.（1988）*Astronomical Diaries and Related Texts from Babylonia*, vol.1, Vienna.

Walbank, *HCP*: Walbank, F.W.（1957-70）*A Hsitorical Commentary on Polybius*, Oxford, 3 volumes.

**参考文献**

Allen, R.E.（1983）*The Attalid Kingdom: A Constitutional History*, Oxford.

Austin, M.M.（1986）'Hellenistic Kings, War and the Economy', *Classical Quarterly* 36, 450-66.

Austin, M.M.（2003）'The Seleucid and Asia', Erskin（ed.）, *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 121-33.

Beloch, K.J.（1925-27）*Griechische Geschichte*, 2. Aufl. IV.Band, 1.und 2. Abtlg., Berlin.

Bengtson, H.（1937-52）*Die Strategie in der hellenistischen Zeit*, I - III, München.

Bengtson（1960）*Griechische Geschichte*, München（Zweiter Aufl.）.

Bevan, E.（1902）The House of Seleucus, 2 vols., Lonodon.

Chaniotis, A.（2005）*War in the Hellenistic World: A Social and Cultural History*, Oxford.

Grabowski, T.（2011）"Achaeus, the Ptolemies and the Fourth Syrian War", *Electrum* 18.

Grainger, J.D（1997）*A Seleukid Prosopography and Gazetteer*, Leiden and New York.

Grainger（2010）*The Syrian Wars*, Leiden; Boston.

Green, P.（1990）*Alexander to Actium: The Historical Evolution of the Hellenistic Age*, Berkely and Los Angeles.

Gutzwiller, K.（1992）'Callimachus' *Lock of Berenice*: Fantasy, Romance, and Propaganda', *American Journal of Philology* 113, 359-85.

Heinen, H.（1984）'The Syrian-Egyptian Wars and the New Kingdoms of Asia Minor', *CAH* 2nd, VII/1, pp.412-45.

Hoover, O.（2007）*Coins in the Seleucid Empire from the Collection of Arthur Hougton*.

Jähne（1997）'Achaios – König und Rebell', *Altertum* 42, 121-32.

Ma, J.（1999）*Antiochos III and the cities of Western Asia Minor*, Oxford.

Ma, J.（2003）'Kings', in: Erskine（ed.）, *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 177-96.

Mitchell, S.（2003）'The Galatians: Representation and Reality', in: Erskine（ed.）, *A Companion to the Hellenistic World*, Oxford, 280-293.

Mørkholm, O.（1991）*Early Hellenistic Coinage from the Accession of Alexander to the Peace of Apamea*（336-188 BC）, Cambridge

Ogden, D.（1999）*Polygamy, Prostitutes and Death*, Swansea.

Schmitt, H. H.（1964）*Untersuchungen zur Geschichte Antiochos' des Grossen und seiner Zeit*, Stuttgart.

Sherwin-White, S., Kuhrt, A.（1993）*From Samarkhand to Sardis – A New Approach to the Seleucid Empire*, Berkeley and Los Angeles.

Walbank, F.W.（1981）*The Hellenistic World*, London.（小河陽訳『ヘレニズム世界』教文館，1988 年）

Walbank, F.W.（1984）'Monarchies and Monarchic Ideas', *CAH* 2nd, VII/1 , 62-100.

Wörrle, M.（1975）'Antiochos I. Achaios der Ältere und die Galater. Eine neue Inschrift in Denizli', *Chiron* 5: 59-87.

大戸千之（1993）『ヘレニズムとオリエント－歴史の中の文化変容－』，ミネルヴァ書房。

柴田広志（2006）「シリア戦争をめぐる考察」『古代史年報』4 号，11-16 頁。

柴田広志（2007）「ヘレニズム時代の王権と自他認識－セレウコス朝とヘレニズム世界東方を中心に」『洛北史学』9 号，52-70 頁。

長谷川岳男（1995）「マケドニアとローマ－その対立の構造」（『歴史評論』543）37-50 頁。

波部雄一郎（2014）『プトレマイオス王国と東地中海世界：ヘレニズム王権とディオニュシズム』関西学院大学出版会。